

## 日朝における生活改善運動と衣生活の近代化

The Livingly Improvement Movement and the Modernization of Clothes Life in Japan and Korea

井上 和枝<sup>\*1+</sup>, 井内 智子<sup>\*2+</sup>, 平野 鶴子 (柿本つる)<sup>\*3+</sup>  
Inoue Kazue<sup>\*1+</sup>, Iuchi Tomoko<sup>\*2+</sup>, Kakimoto Tsuru<sup>\*3+</sup>

\*1 鹿児島国際大学国際文化学部 鹿児島市坂之上8-34-1

The International University of Kagoshima, Faculty of Intercultural Studies,  
8-34-1 Sakanoue Kagoshima-shi

\*2 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

The University of Tokyo, Sociology/Faculty of Letters, Ph.D. program student

\*3 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

The University of Tokyo, Sociology/Faculty of Letters, Ph.D. program student

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: In Japan as the farm village labor wear, the spread of Monpe was different according to the region. However, after the Japan-China War Monpe was established in the city as clothes of the women when they trained the air defense.

On the other hand, in around 1936 Monpe had already been brought in to Colonial Korea. Monpe was worn in the air defense training as well as Japan. Monpe was encouraged when the women were mobilized to the farming labor, and it had spread widely.

### 方法

- ① 研究第2年目に当たる2010年度は、各自が昨年度収集した基礎資料の分析を行い、ジェンダー史学会で、パネル「『もんぺ』の日常化と帝国・植民地」として共同発表した。
- ② インタビューの一部を翻訳して公表した。
- ③ 日本農村におけるズボン型作業着の普及について、長野・山梨・静岡の3県を中心に、資料収集し、また都市におけるモンペの普及について調査した。
- ④ 韓国で植民地期の衣生活に対するインタビューを継続した。

### 結果と考察

〔1〕 帝国日本における労働着「もんぺ」の普及

(1) 農村におけるズボン型作業着の普及

大正時代中部地方の女性の農作業着(下衣)について、大まかな形態でスカート型・ズボン型・モモヒキ型に分類した。ズボン型作業着に注目すると、静岡県ではほとんど着用されておらず、山

---

\*1) kazue9228@nifty.com

梨・長野では着用が3割を超えていた。昭和初期になると、「能率」や「健康」といった新しい理念の下、ズボン型作業着の普及運動が行われ、3県とも着用される割合が増えていく。写真1は長野県で普及が図られたズボン型作業着の例で、左は同県東筑摩郡島内村婦人会のもの、右は同県で開かれた産業組合大会での写真である。ただし、もともとズボン型作業着の着用割合が低かった静岡県では、女性がこの形の服を着ることに抵抗が強く、なかなか普及が進まなかった。このような普及の経緯は、論文「生活改善運動によるズボン型下衣の普及」(仮題)としてまとめ、雑誌に投稿する予定でいる。

### 写真 1 長野県での改良農作業着



出典 左:『家の光』10巻5号、1934年、グラビア。

右:北野新太郎編『第三十一回全国産業組合大会記念』産業組合中央会長野支会、1935年。

### (2) 都市におけるモンペの普及

1937年、日中戦争勃発当初、女性は“非常時”に備えた服装をすべきだという論調が高まり、愛国婦人会や、女子青年団といった女性団体が“非常時にふさわしい”新たな制服をつくる動きがみられた。この動きは社会的な流行となり、一時は百貨店や問屋、メーカーが「報国服」や「国家総動員服」といった商品を大々的に売り出すまでに至ったのだが、1941(昭和16)年に女性の国民服制定が論議される際には、女性の非常時服＝モンペのイメージが定着し、これらの商品は着られなくなっていた。筆者は、この転換の契機として防空演習に注目し、ジェンダー史学会で報告した。

### 写真 2 1934年東京・横浜・川崎三市防空演習



出典:千田哲雄『防空演習史』防空演習史編纂所、1935年

防空演習は1930年代初頭から行われていた。だが当初は、演習の中で女性は物資配給と救護という役割しか割り当てられておらず、写真2のような服装で演習に従事していた。写真2左は配給班に組織された女性たちで、右手前の女性は和服に割烹着をつけている。そして同右は婦人救護班とされた女性たちで、手前の女性をはじめ、皆白衣を着ている。

しかしながら、日中戦争後、家庭防火群が組織されるようになった。家庭防火群では防火作業を行うための活動的な服装が求められ、女性はモンペをはくことが推奨されるようになった。写真3は、1937年10～12月に赤十字博物館で開催された「防空法徹底強化防護展覧会」でのポスターで、右の女性はズボン、左の女性はモンペをはいている。長野・山梨・静岡3県での調査でも、37年以降、各地の防空演習でやはりモンペが推奨され始めたことが史料上確認できた。

写真3 家庭防火群結成後の展覧会でのポスター



## 〔2〕 植民地朝鮮におけるモンペの普及

### (1) 婦人の労働服改良からモンペへ

農村振興運動から始まる女性の農業・鉱山等の労働への進出・動員にともなって、伝統的な朝鮮の衣服の不便さが問題にされるようになった。その結果、農村振興運動の中では面や道などの地方自治団体や地域の組織、さらに総力戦の展開とともに、国民総力連盟や総督府傘下の組織において、婦人労働服の改良が模索された。これらは主に下衣であるチマの改良や洋服型への転換が基本になっていたようである。

女性たちの労働着として、徐々に広まり、やがて、公的機関が着用を推進するようになったのが、日本の労働着をもとにした「モンペ」である。この過程は、日本内地において、女性用標準服の制定作業の中では当初排除されていたモンペが、女性標準服の座を押しつけて、全国的に普及していったのと軌を一にする。

モンペの着用が最初に見られるのは、管見の限りでは1936年2月の咸鏡南道第一線国境警備の慰問使である総督府の新員警務課長の視察報告の中である。そこでは警官のみならず夫人、子供に至るまで一体となって警備の任を果たしており、女性たちは「モンペイ姿」で氷上に伏して長銃の射撃訓練を行っているというものである。この夫人たちはおそらく日本婦人と推測できる。国境警備の最前線で補助的存在として、自発的にモンペを着用したと考えられる。日本内地での農村労

働着以外のもんぺ着用と同時期である。

また、1938年には大邱の女高生が慰問袋の発送に全員がモンペを着用している。従来、朝鮮でのモンペの着用開始時期と考えられているより早い時期にすでに着用されていたことを示す。

## (2) モンペ普及と「モンペ必着運動」

1938年には、防空訓練の時、大邱にもモンペの一団が現れ、モンペは「時代の流行」とされている。内地同様、防空訓練すなわちモンペというイメージがすでに定着していたと考えられる。

写真4 慰問袋の発送状況



出典：『自力更生彙報』59  
1938年8月

写真5 大邱防空訓練  
モンペ部隊



出典：『毎日新報』  
1939年7月9日付

そのような中で、モンペの普及に最も力があつたのは、女性の農業屋外労働への動員であつたと思われる。これによって、女性たちは一日中、モンペを着用せざるをえなくなる。

たとえば、黄海道では、屋外労働とあわせて婦人作業服を制定し、着用させるようにした。それは「ホッパジ」(女袴)を一部改良して作り、内地の「モンペイ」に修正を加えたものである。作業に便利であるとともに、見た目もよく、衛生上も便利な衣服であるとして、急速な普及を図り、労働能率を高めようとした。多くの地域で屋外労働にはモンペの着用が奨励されていくが、江華郡のように、郡でモンペを大量購入して、安く郡民に買わせ、作業効率を上げて、食糧増産に励めるよう指導している地方もある。

戦時体制の強化とともに、京城のような大都会でもモンペの着用は強制的になっていく。「モンペ必着運動」である。モンペ不着の場合、各官公署への出入り、百貨店、映画館、劇場、府民館等への入場を禁止したり、電車、バスの乗車も「モンペ」を着用しなければ乗車を謝絶などの強化策がとられた。さらに全国の家庭にまでこれを推し進めようとしたようである。内鮮婦人とともにモンペを着用させることによって、服装の一斉化を増進し、内鮮一体の皇国女性を作ろうとしたと考えられる。

しかし、モンペが朝鮮の女性服の中の下着と形態が似ているため、自身の女性らしさを毀損するという理由から拒否する女性もいて、必ずしもこの必着運動は十分な成果を収めたとは言いがたい。また、もんぺを洋服式に着こなすなどの注意深い抵抗も行われたという。それにもかかわらず、戦時体制の深化とともに、もんぺは朝鮮女性の労働服としての地位を固めていったことは否定できない。